國學院大學学術情報リポジトリ

『平家物語』の〈反鎌倉〉性と〈親鎌倉〉性：六代物語の表現構造

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學 公開日: 2024-05-21 キーワード (Ja): 同心円構図, 読者誘導, 女性化, 代受苦, 綱引き キーワード (En): 作成者: 野中, 哲照, Nonaka, Tessho メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000393

『平家物語』の〈反鎌倉〉性と〈親鎌倉〉性

——六代物語の表現構造——

野中哲照

一　はじめに

語り本系の『平家物語』は、断絶平家型（十二巻本）と灌頂巻型（十三巻本）に分けられる。前者は六代（平清盛の曾孫、すなわち平家の嫡流）の斬首で終え、後者は建礼門院（平家の生き残りの女性）による一門供養で結ぶ。断絶平家型が元で、編年的な位置に置かれていた建礼門院関係記事を抜粋し巻末に別立てとして灌頂巻が特立されたとするのが通説である。そもそも、なぜ六代の斬首をもって『平家物語』が終わろうとするのか、そのことにどのような意味が込められているのかが明らかにされなければ、それと別の道を歩み出した灌頂巻型の本質も見えてこない。本稿で問題にするのは、覚一本『平家物語』でいうところの「六代」「泊瀬六代」「六代」（の六代に関する部分）である（これらを六代物語と呼ぶ）。『平家物語』の代表的諸本に目配りしつつ[1]、『六代御前物語』『六代君物語』も視野に収めて論じる。

なお、六代らの住まいは正確には「大覚寺と申す山寺の北のかた、菖蒲谷と申す所」だが、覚一本の本文中で「大覚寺」とも略されるので、本稿でもこれを大覚寺と略記する。また、章段名を指す場合はカギカッコを付けて「六代」と表記し、人名

の場合はこれを付けずに六代と表記する。本文の引用は、とくに断らない場合は覚一本による。

二　緊張感を演出するための枠組み設定

六代助命の物語「六代」には、時間・空間のリミットが設定されている。諸本で日付が共通して存在するのは、北条時政が六代を連れて京都六波羅を出発する「十二月十六日」のみである[2]。これより前、文覚は「二十日が命を延べて賜べ」と言って京都―鎌倉を往復しようとする。『延喜式』によれば京都―相模間は十三日間（空荷・徒歩）で、文覚は早馬で片道八日程度（別の文脈だが四部本・延慶本に伊豆―福原間を片道七日、八日で上り下りする（長門本は五、六日）とあるのが参考になる）、往復で十六日程度、頼朝と交渉する時間を勘案して「二十日」の猶予と申し出たという想定だろう。それ以前に、北条が六代の身柄を探し出す二日間があって（第五節）、六代の乳母が文覚のもとに行き、文覚が六波羅に行って北条と交渉するところまでに三日間程度かかったとして、それから二十日間あまりで十二月十六日になったのだとすれば、十一月二十三日ごろ始動の物語だということになる（南都本は十一月二十一日始動とする）。

そして「文覚房の約束の日数も過ぎぬ。さのみ在京して、年を暮らすべきにもあらず」とあることから、北条は正月を鎌倉で過ごそうと考えて離京のタイムリミットを設定したのだと読める（四部本ほぼ同文。八坂系一類本・南都本は「さのみ、都にて年月を送るべきやなし」と年末期限の意識が薄い。延慶本・城一本なし）。この物語の時間は、後ろ（正月）から逆算的に設定されているのである。しかも、北条は文覚との約束の二十日間が過ぎてすぐに京都を出発したわけではない。「文覚房の約束の日数も過ぎぬ」とあったり「二十日に余る」（母上の言葉）とあったりするように、北条は二十日間を過ぎてもぎりぎりまで文覚を待ったという表現である（二十一日か二十二日か）。それが「十二月十六日」ということである。早馬の文覚の旅程と違って六代一行は輿を使うので十三日間ほどの想定となり、年内に鎌倉に到着するにはぎりぎりの期限ということになる。このように、タイムリミットを設定することによって、物語に時間上の緊張感をもたらしている。もちろん、読者を引き付けるためである。

そして、六波羅にいる六代がいつ斬られるのかを母上が心配して斎藤五・六に尋ねると、二人は「この暁」（明朝）と答えている。それは、（斎藤五・六が）「聖（文覚）もいまだ上り候はず。北条も、暁、下向仕り候ふ」と母上に伝えた「暁」と重なる。

そもそもの頼朝からの最初の命令は〝平家の子孫を根絶やしにせよ〟ということであったので、赦免されていない以上、北条は六代を斬らねばならない状況にあった。それが大前提である。六波羅で六代を処刑して北条は年内に鎌倉に下向するという枠組みが想定されていると考えてよい。ゆえに、六波羅で六代を斬首することなく生かしたまま東に向かって北条が連行するという展開が、特別な配慮の賜物として浮かび上がる。母上の口説きが機能するところである（第六節）。

空間的なリミットもある。それが、駿河国の千本松原（沼津市）である。そこから先は、大きな山塊が存在するからである。それよりも向こう側は、頼朝支配下の坂東八か国が広がる。頼朝の赦免状が出ていない以上は、生きたまま六代を坂東八か国に入れるわけにはいかない。北条は六代に「山のあなたまでは、鎌倉殿の御心中をも知りがたう候へば」と言う。境界の峠越えについて延慶本・長門本・南都本は足柄・箱根の両方、屋代本・八坂系一類本・二類本は足柄を想定するのだが、その手前で六代の延命か処刑かの判断をしなければならないということだ。つまり千本松原とは、文覚の登場を限界まで待ったことを意味する地なのである（佐々木八郎（一九三八））。文覚の弟子の僧侶（異本では「覚文」）が馬で駆けながら手を上げても気づいてもらえないと察して、頭にかぶっている傘を差し上げて必死のさまで手招きをする。読者がハラハラドキドキさせられ、間に合うかどうか、間に合ってほしいと思わせる演出であり、これによって読者がさらに物語世界に引き込まれる。間一髪の表現である。

このように、この物語は時間的な限界、空間的な限界を利用して枠組みを設定し、読者に緊張感をもたらす仕掛けを用いているのである。

六代物語が〝つくられた物語〟（虚構）であるとの立場を明確に示したのが、佐々木八郎（一九三八）である。佐々木は文覚の関東下向が事実だとは考えにくいことを指摘して、間一髪のところで赦免状を持った文覚（および覚文）が現れるという『平家物語』の劇的な場面は虚構であると推定している。また、千葉知樹（一九九七）は六代の「十二歳」という年齢を、けなげにもいとおしくも描きやすいところに設定したものだとする。これらは六代物語の全体が虚構であると指摘したに等しく、論者も賛同している[3]。

三　〈同心円構図〉の設定——周縁人物の機能——

覚一本の章段名でいうところの「六代」で六代が斬られるこ

とはなく、彼が斬られるのは次の「泊瀬六代」を経て「六代被斬」においてである。「六代」は、むしろ六代助命の物語である。そのことに、何の意味があるのだろうか。

「六代被斬」の中でも六代斬首記事は一四六字しかない（覚一本の釈文での文字数。以下同じ）。しかも、岡辺泰綱があっさりと六代を斬っている。六代が斬られたという事実（物語内の事実）だけが重要なのであり、そのプロセスにはまったく関心が示されていない。ここには母上、乳母、斎藤五・六の悲嘆するさまが描かれることもない。ところが、六代助命譚「六代」（六八五〇字）＋「泊瀬六代」の母上や乳母との再会部分（一〇八二字）＝計七九三二字）は六代斬首記事の五四倍にも及ぶ。文字数だけの問題ではなく、「六代」においては斬り手として選ばれた狩野工藤三親俊が前後不覚になって刀を振り下ろすことができず辞退する。ほかの武士たちも、譲り合って斬りたがらない。六代助命譚は、〝いかに六代の命を誰もが惜しんだか〟という物語である。物語の構造としては前半部で読者を緊張させ、後半部で六代救済に向かうV字型構想に支えられている。すなわち『平家物語』から「六代」だけを切り出しても鑑賞しうる独立性・完結性をもっている。一方、六代斬首記事はV字型や逆V字型の物語といった結構をもっておらず、事実（物語内の事実）が淡々と述べられているのみである。このように、「六代」と「六代被斬」の非対称性は、おおいに問題にされるべきところである。

『平家物語』の外部に、『六代御前物語』『六代物語』の存在がある。いずれも、『平家物語』の「六代」と重なる構造を有している。いかに多くの人々が六代の命を救おうとしたか（殺したくなかったか）という物語である。結末としての救済・助命という事実が問題なのではなく、そこに至る周縁人物の働きを描くことに、多くの筆が費やされている。つまり「六代」は〝この人物を斬るべきではなかった〟〝救うべきであった〟〝平家の嫡流を断絶させるべきではなかった〟というテーマ性をもった物語なのである。ということは、六代が斬られたという事実（物語内の事実）を前提として、「六代」という助命物語が成り立っているということである。たとえていうならば、ギャンブルで破産した結末を見据えて〝いかに多くの人々が手を変え品を変え彼をギャンブルから引き離そうと働きかけたか。その人を大切に思っていたか〟という物語を作るようなものである。その周縁人物のありようを問題にすべきである。

「六代」の中で悪役と言える人物は鎌倉殿（頼朝）のみで、それも外圧としての影響力が機能するのみであり、登場人物とはいえない。そして、それに媚びへつらう都人たちも外圧と同調

している。それらは緊張感をもたらす機能のみが働いていて、物語内での存在感がない。泣き顔など表情が活写される人物はすべて六代の味方であり、六代の命を惜しむ側に回っている。この物語の中心人物は六代で、その六代の命を必死になって支えようとしたのが、母と乳母である。それに、六代の妹と家人である斎藤五・斎藤六が加わる。血縁者でも主従関係でもない文覚も、六代を必死に助けようとする。そして、加害側の北条時政や家の子・郎等に至るまで六代の命を惜しむ[4]。〈同心円構図〉になっているのである。いうまでもなく、その構図の外側には読者がいる。周縁人物がつくりだすこの〈同心円構図〉は、読者心理を誘導する機能を果たしている[5]。

そもそも語り手は物語の内部と外部の境界に立っていて、われわれ読者に近い存在である。そして六代助命譚には六代を中心とした〈同心円構図〉が仕組まれていて、語り手は六代だけでなく母上、乳母、斎藤五・六、北条、家の子・郎等にたいしても同情的である[6]。物語内の誰ひとりとして六代斬首を願ってはいない。六代を失えという外圧に抗するかのように、物語の内側の登場人物たちは結束して六代の命を助けようとする。そこに読者も引き込まれるような仕掛けになっているというわけである。そして六代の命は、一時的にであれ救われる。六代助命譚すなわち「六代」とは、「六代被斬」の前にあって、六代をいかに強く激しく救おうとしたかが語られた物語である。それが六代助命譚における周縁人物や評語の機能である。

四　斎藤五・六の機能

六代に仕えた家人斎藤五・六兄弟は一六か所に登場しており、それを機能分類すると三つに分けられる[7]。

(1)　メッセンジャーとしての機能〔物語内部での伝達機能〕。

(2)　六代への忠誠心を表す周縁人物としての機能〔外部と内部をつなぐ読者誘導機能〕。

(3)　第二の機能の延長線上にあるもので、読者心理を周縁人物に同調させる機能〔同右〕。

この三番目について分析する。馬に乗るとか乗らないなどの文脈に関わるものである。大覚寺菖蒲谷から六波羅まで（約一五キロメートル）、斎藤五・六が「徒歩・裸足」で六代の輿に随行する。ところが六波羅から東下りをするとなると（結果としての終着点千本松原まで約三五〇キロメートル）乗馬を辞退するのみである。現実的に、その距離を「裸足」で歩くのは無理だからだろう。そのようなリアリティとの整合が図られている。そして

斎藤五・六は、六代の助命が叶った後、上洛の際には遠慮なく乗馬する。このことは、六代が危機的な状況にある時には斎藤五・六も自らの身を傷め、六代が解放された時の彼らは自傷をやめたことを示している。ということは、斎藤五・六が六代の苦境を我が身に受けようとしている存在であることを意味する。代受苦である。

代受苦とはもともとは仏教語で、他者の代わりに苦しみを受ける菩薩の慈悲心のことである。身代わり不動尊もその系列に連なる。ほかの誰かのためにと願いを込める際、自分の身に苦労が多ければ多いほど、相手が楽になるという発想が生まれる（お百度参りなど）。ここで斎藤五・六が足を傷めようとしたのも、六代の身の保全を願ってのことだろう。

問題はここからで、乗馬を辞退する斎藤五・六の姿を読まされる読者も、斎藤五・六の痛そうな足をイメージせざるをえない。六代の身を切実に案じる斎藤五・六の心情への、読者の感情移入を惹起させる仕掛けだろう。読者は周縁人物たる斎藤五・六に同調させられ六代の身をいとおしく思わざるをえないように仕向けられる。それが、斎藤五・六の不乗馬の表現機能である。

五　二日間の探索物語の設定
——六代像の二面性の投入——

六代物語の序盤、北条とその軍勢が大覚寺に六代を捕えに行く場面は、不思議なことに二日間の物語になっている（『六代君物語』のみ一日間。注（16）参照）。一日目は北条が一人の使者を遣して、そこにいるのが本当に六代であるのかどうかを確認させる場面で、二日目は何百騎か（他本では五百騎とする）の軍勢で御所を取り囲んで六代の身柄を捕縛する場面。後文で、北条が文覚にわざわざ「一昨日聞き出だして、昨日迎へ奉りて候へども」と説明する部分もある。大局的に見れば、六代潜伏の情報を得て即日数百騎の軍勢で大覚寺に押し寄せたというストーリーも当然作りうるはずなので、一日目の偵察部分を設けているところを問題視すべきだろう。このことは、六代の人物像の二面性を表現することと関連している。一日目は一人の人物がこっそりと大覚寺の中を覗きに行っている。

時政、やがて人を付けて、そのあたりを窺はせけるほどに、
　或る坊に、女房たち、幼き人あまた、ゆゆしく忍びたる体にて住まひけり。籬の暇より覗きければ、白い犬子の走り

出でたるを取らんとて、美しげなる若君（六代）の出で給へば、乳母の女房と思しくて、「あな、あさまし。人もこそ、見まゐらすれ」とて、急ぎ引き入れ奉る。

諸注が指摘するように、『源氏物語』若紫巻を踏まえた場面である。若紫を諫めた女房（少納言）と同じように、ここでは乳母の女房が六代を諫める。この場面の存在意義は、少し先を読み進めると納得させられる。ここで幼く見えた六代は、公衆の面前に出ると十四、五歳と思われるほどの——十二歳とは思えない——毅然とした姿を見せるのである。

（母上が）「さて、この子（六代）は何としてあるぞ」と宣へば、（斎藤五・斎藤六が）「人の見まゐらせ候ふ時は、さらぬやうにもてなして、御数珠を繰らせおはしまし候ふが、人の候はぬ時は、御袖を御顔に押し当てて、御涙に咽ばせ給ひ候ふ」と申す。

他人が見ている時とそうでない時で、毅然として大人っぽくもあり、またあどけなく子供っぽくもあるというのだ。右の部分に続けて、母上は「幼けれども、心大人しやかなるものなり」と言っている。つまり、平静を装っているのは虚勢を張っているからであって、内面はまだ幼いのだということを表現している。このような内面と外見、私と公の描き分けがみえてくると、六代が六波羅に連行されてすぐの頃に母上の夢に出てきた姿（白馬に乗って登場し、さめざめと泣く）は、幼さの表現だということがわかる。

鎌倉方の武士に見られていないところでは、恋しい、恨めしいなどという感情をあらわにし、「さめざめと泣」く。また、助命されて上洛し、大覚寺を訪ねて母に会えなかった際、六代は犬に話しかけるのだが、犬の返事があろうはずがない。先述の「白い犬子（えのこ）」とここを呼応させていることは明らかで、母を慕う十二歳の幼げな六代を描いている。ところが、鎌倉武士たちの前では、毅然とした態度を見せる。千本松原でまさに斬られようとした際、母への遺言を斎藤五・六に託す場面で、あとに残される母の心情を思いやる（横に北条がいる）。これに続く場面でも、斬り手が斬りやすいようにとの配慮から、髪を振り分けている。その後も取り乱すことなく、「西に向かひ、手を合はせて、静かに念仏　唱へつつ、頸を延べてぞ待ち給ふ」と見事な最期を迎えようとする。

このように、一見、六代像の矛盾や亀裂とみえそうな様相は、彼の外と内、公と私を描き分ける意図によるものだったことがわかる。六代が大覚寺から連行されようとした際、十歳の妹の様子はあどけなく語られている。そして十二歳の六代は「世の

つねの十四、五よりは大人し」いという。明らかに、幼い妹と大人びた兄との対照性が仕組まれている。白い犬の子を追う六代像とは、まったく違った姿を見せているのである。

以上のように、六代像には理知的で毅然として大人っぽい面と情緒的で幼い面とが意図的に仕組まれているというわけだが、両者の比重は等価ではない。覚悟を決めた見事な斬られかたを見せようとした六代像は虚勢を張ったものであって、日常の本来的な素顔はまだ幼いのだというメッセージのほうが表現戦略の眼目だろう。だから不自然にも、六代が捕われるまでの経緯が二日間で設定されているのだ。その目的とするところは、六代にたいする哀惜の念を読者に抱かせるためだろう。物語世界に、読者を引き込んでいるのである。これは、巻十一「先帝身投」の安徳帝像と重なる。(8)

六代像の二面性の意義について参考になるのが、巻九「木曾最期」である。今井兼平の最期は読者から称賛される英雄的な死に方であるのにたいして、もう一方の木曾義仲は読者から哀惜される不憫な死に方である。(9)登場人物が称賛の対象となれば英雄化され、読者からの心理的な距離が遠のく。ふつうの読者は今井兼平のような死にかたはできないし、六代のように取り乱さないまま斬首を待つこともできない。称賛される英雄的な人物は憧れの対象とはなるが、距離があるだけに読者の日常に入ってこない。ところが哀惜の対象となる登場人物は読者が日常で接している幼い子どもと重なり、読者の琴線を振るわせる。称賛（興奮→アドレナリン系）よりも哀惜の念（同情・共感→オキシトシン系）のほうが深く永続的なのである（興奮は一瞬）。つまり六代物語で重要なのは、見事な最期を迎えようとした六代像のほうではなく、白い犬の子を追い、涙を流す弱々しい六代像なのである。

六　母上の機能、乳母の機能
——六代物語の〈女性化〉——

「六代」には、重要な女性が二人登場する。一人は六代の実母（「母上」、維盛の「北の方」）であり、もう一人は「乳母の女房」である。六代との関りかたについて母上は、

いはんや、これ（六代）は産み落として後、一日・片時も身を放たず、人の持たぬものを持ちたるやうに思ひて、朝夕二人の中にて育てしものを。

と言い、乳母は、

血の中より生ほし立てまゐらせて、今年、十二にならせ給

ひつる若君（六代）を、昨日、武士に捕られて候ふ。

と言う。前者の母上の言葉の直前には「人の子は、乳母などの元に置きて、時々見ることもあり。それだにも、恩愛は愛しき習ひぞかし」とあるので、排他的なほどに乳母の存在を消そうとしている。後者の乳母は母上の言葉に対抗するかのように「血の中より生ほし立てまゐらせて」と言っていることになる。「血の中より」は諸注によれば分娩後の悪露のことかと考えられ〝誕生の時より〟と訳される。「生ほし立て」は言うまでもなく〝育て上げる〟というニュアンスである。両者が矛盾しないのは、母上は乳母のいる前で口説いているのにたいして、乳母は文覚に向かって、すなわち母上のいないところで発言している内容だからである。しかも乳母は文覚に当該人物が六代であることを隠し、「平家小松三位中将（維盛）の北の方の、親しうまします人の御子を養ひ奉る」と韜晦している。ゆえに、けっして矛盾していることにはならず、母上と乳母が六代にたいする愛を競い合っているかのように描かれているというべきである。乳母の悲嘆のさまは、「聖の前に倒れ伏し、声も惜しまず泣き叫ぶ」とも語られている。

この物語の展開を支える部分で、母上と乳母には役割上の住み分けがある。乳母は〈六代と文覚をつなぐ機能〉を果たしている。六代が六波羅に連行されたあと、乳母がその助命を文覚に陳情したからこそ次の展開につながっている。また、母上は〈六代の東下りを誘発する機能〉を負っている。文覚が鎌倉から戻る期限の二十日間が過ぎて六代が六波羅で斬首される可能性もあった中で、母上が斎藤五・六を前に口説く発言の中に、

大人しやかならん者の、「聖（文覚）の行き合はん所まで、六代を具せよ」と言へかし。もし、乞ひ請けても上らんに、先に斬りたらん悲しさをば、いかがせんずる。

とある。頼朝の赦免状をもって京へと戻ってくる文覚の姿を想像し、その文覚と出会う前に六代を斬ってしまっては取り返しがつかない、という。母上の言葉を聞いた斎藤五・六が北条にこれを伝えたとする記述は存在しないが、後文に北条が六代を連れて都を発っているので、母の願いは結果として届いたことになる（大方の読者は斎藤五・六から北条への伝達を想定する）。六代助命というハッピーエンドを迎えるためには、乳母の〈六代と文覚をつなぐ機能〉も、母上の〈六代の東下りを誘発する機能〉も必須なのである。二人の女性に役割分担があるということは、母上の言葉と乳母の言葉は、甲乙つけがたく六代への愛を競い合っているように形象されているということである。戦略的に投入された不協和音のようなもので、読者を物語世界に惹きつ

けるための仕掛けなのである。

そもそも『六代御前物語』や『六代君物語』では〈六代の東下りに機能する母上〉は存在しない。ただ、悲嘆するばかりの母上である。ということは、六代物語の原型は〝乳母の物語〟であって、それに〝母上の物語〟が覆いかぶさってきたのだろう（覚一本へ向けて）。そして、文覚という一人の僧が奔走して助命した物語から、総体的に文覚の働きが弱められ、乳母、そして母上という二人の女性の悲痛な願いが六代の命を助けたのだという変容過程を推定することができる。おおざっぱな言い方をすれば、〈男の物語〉から〈女の物語〉への変容である。女性の泣き顔や涙の描写は、そこが情緒的な場面であることを読者に示す働きがある（貴種的な男性についても同様だがそれは女性版の応用編）。〈女の物語〉への変容は、物語世界を印象操作し、読者に同情・共感させるためになされたものだろう。[10]

『平家物語』を読む者、あるいは琵琶法師の語りを聞く者には、当然女性もいただろう。子供を持つ母親もいるし、子供を育てる仕事をしている女性もいる。それらの子供の周囲を取り巻くように見守る人たちもいる。多くの読者を引き付けるために、母親的な女性の心情に訴えたり、あるいは教育係的な女性の心情にも訴えたりする必要があっただろう。六代助命譚において、母はおおむね情緒的に描かれているのにたいして、乳母には教育係として意志的なところもみられる（乳母が母上と一緒になって嘆くところもあるが）。六代物語は、多くの女性読者・聴衆を惹きつけるために〈女性化〉したのだろう。情緒的な読者心理の誘導を行っているのである。

七　〈反鎌倉〉としての六代物語

六代の名は、伊勢平氏の中興の祖である平正盛を初代として、それから六代目に当たることによる。①正盛—②忠盛—③清盛—④重盛—⑤維盛—⑥六代である。その呼称自体に、彼が平家の嫡流であること、系譜的な意識の中で彼を意味づけようとしていることが窺える。諸本の中には、六代ではなく三位禅師の呼称のほうが一般的なものもある（覚一本では「三位禅師」は一例のみ）。そして六代は、維盛の子であること、重盛の孫であることが意識されて語られている。六代が十四、五歳になった時、源頼朝が文覚に「さても維盛卿の子息は、何と候ふやらん」と尋ねる。このような頼朝の警戒心が伝わってきたため、六代は十六歳で出家し、父維盛の足跡を訪ねる旅に出る。「父の善知識したりける滝口入道」「父の渡り給ひける山成の島」「我が父

は、いづくに沈み給ひけん」「父の御骨やらん」「父の御ためと供養して」と、「父」が五度も出る。六代は個としてのありようが語られる以前に、〝維盛の子〟として意味づけられている。六代は個人名であるように見えながら、平家の嫡流が断絶する（断絶させられる）ことの重さを込めて象徴化された人物なのである。

ところで、『六代御前物語』[11]は前半部（維盛部分）と後半部（六代部分）に分けられるが、春日井京子（一九九五）はそれと延慶本とを比較検討して、①「維盛部分は六代が登場する都落ちの場面はかなり『平家物語』の描くところと近」く、②「それ以降（の維盛部分：野中補記）は『平家物語』諸本よりも遥かに本文が簡略」で、③「六代部分の本文が常に『平家物語』と緊密な関係にある」と指摘している。このことは、『六代御前物語』の後半部分（六代部分）が先に固定化し、前半部分（維盛部分）が抄出的に抜粋されたり創作されたりしたことを示している。このことも、六代を個人としてではなく維盛の子として、すなわち小松家の末裔として意味づけようとしていることの何よりの現れだとみるべきである。六代が斬られたことは、そもそも平家の嫡流を断絶させてしまったとの意味を込めて形成され始めたということになる。

このように、六代の助命物語はそもそもが認識上の「断絶平家」の枠組みの中で発生させられたものと考えてよい。言い換えるならば、見た目には六代は一時的に助命されたように見えるが、その後の斬首（断絶）を暗黙の結末として見据えつつ、（助命という事実よりも）助命のためにどれだけ多くの人々が粉骨砕身したのかということを示すことを目的として作られた物語であったということだ。そしてそのことは、〝あれほど多くの人々が、しかも敵であるはずの鎌倉方の北条時政やその家の子・郎等まで六代助命を切望し文覚も奔走したのに、その六代を出家後まで、しかも二十年後まで執拗に追い続けて殺した〟という「鎌倉殿」への批判を込めたものと読み取るべきだろう。そしてそのことと先述のような読者誘導のための〈同心円構図〉の設定や語り手の評語による印象操作を考え合わせると、六代物語は〈反鎌倉〉の婉曲的表現であると考えざるをえない。[12]

今井正之助（一九八三）は〈反鎌倉〉という用語を用いていないものの、六代物語と忠房・宗実ら平家の残党狩りとの通底を見抜いた数少ない論稿である。

八　六代物語の流動展開
——〈反鎌倉〉から〈親鎌倉〉へ——

前節で六代物語の〈反鎌倉〉性について指摘した。それは、『平家物語』諸本、『六代御前物語』『六代君物語』のすべてに共通した要素である。六代物語のそもそもの基本骨格が〈反鎌倉〉的だといってよい。ただし、八坂系一類本・南都本は文覚鎌倉下向記事（文覚が鎌倉に到着して頼朝と六代助命を交渉する内容。釈文で八八〇字余り。以下、八坂系一類本で代表させる）を持っているのにたいして、他本にはそれがない[13]。次のような内容である。

（1）文覚は弟子の覚文を連れて鎌倉に下った。
（2）頼朝に対面した文覚は義朝の髑髏を出し、四年前に出したものは偽物だと言った。
（3）髑髏には清盛が付けた刀傷があり、頼朝は平家の末裔を滅ぼしたいと思った。
（4）弟子の覚文に持たせてあった正清の髑髏は、正清の娘の手に渡った。
（5）文覚は頼朝に六代助命を申請したが、頼朝が許さなかったために日数を費やした。

次の二点が特筆される。

A文覚が源義朝の髑髏をもって頼朝の前に現れている点（覚一本の「紺掻之沙汰」に相当）。

B平家にたいする頼朝の復讐心が描かれている点。

これまでの『平家物語』研究で増補か省略かの議論が行われてきたところだが[14]、記述量の多寡だけでなく認識の相違をこそ問題にすべきである。八坂系一類本には、「紺掻之沙汰」が存在せず（勝長寿院の縁起的要素も含めて）、「六代」の中にその類似内容が含まれている。当然AとBは連動していて、八坂系一類本には平治の乱以降の平家にたいする頼朝の怨恨が色濃く描かれている。『平家物語』諸本および『六代御前物語』『六代君物語』がいずれも頼朝批判を込めた〈反鎌倉〉認識に支えられている中で、文覚鎌倉下向譚をもつ八坂系一類本は〈反鎌倉〉性をより先鋭化させたものとなっている[15]。

そもそも文覚単独ではなく弟子の覚文を伴っているのは、義朝・正清主従の髑髏が揃って供養されるという勝長寿院縁起譚が背景にあるからだろう（髑髏が二つだからその持ち手も二人必要）。六代助命のためだけなら、覚文の登場は不要である。文覚鎌倉下向譚の中の平家への怨恨を語る部分は、頼朝像に傷をつけるものである。〈平家への頼朝の強い恨み→六代を許さない→説

得に時間がかかる〉と緊密な脈絡を成している。処刑寸前で覚文→文覚の二段構えで登場する部分との整合性のために八坂系一類が勝長寿院縁起に関わる文覚鎌倉下向譚を挿入したとは到底考えられないのだ。八坂系一類本の先行は動かないだろう。

そして文覚の到着遅延の理由について、八坂系一類本では頼朝の説得に時間がかかったと語り、文覚鎌倉下向譚を持たない覚一本等では頼朝に従って文覚も那須野の狩りに随行したと語っている。さらに、覚一本の「紺掻之沙汰」に相当する章段や文脈が、八坂系一類本には存在しない。これらを総合的に考えると、覚一本が①頼朝像の傷を薄めるために文覚鎌倉下向譚を削り、②文覚遅延の理由として那須の狩りのことを代替挿入し、③「紺掻之沙汰」を新たに挿入した（勝長寿院縁起譚の復活的再生）と考えるのが合理的である。

では、八坂系一類本が最古態なのかというと、そうでもない。そもそも覚文（あるいは無名の使僧）がまったく登場せず、文覚本人が六代処刑場面に駆けてくるシンプルなパターンがある。『六代君物語』である（『六代御前物語』ではなく）。もちろん文覚・覚文が義朝・鎌田の首を頼朝のもとにもたらす話もない。両方存在しないので整合的である。ここから想定しうることは、『六代君物語』が構造的には最古態を留めているということだ。[16]

六代物語の変容過程の全体をあらためて概観すると、『六代君物語』のようなシンプルな構造で成立し、その後、〈反鎌倉〉の立場から八坂系一類本が勝長寿院縁起譚を利用しつつ文覚・覚文が義朝・鎌田の髑髏をもたらす遺恨話を挿入し、なおかつ六代処刑寸前に覚文→文覚の二段構えで登場する構図を設定したのだろう。そこで体制に擦り寄る方向転換が行われて頼朝像の傷を薄めるべく文覚鎌倉下向譚を消したのが、延慶本・南都本・屋代本・覚一系周辺本文・一方系諸本ということになる。[17]〈反鎌倉〉の八坂系一類本と〈親鎌倉〉の覚一本とは両極的だということになる。八坂系一類本が〈反鎌倉〉のエネルギーを強く保存していたのにたいして、その後、怨親平等的な平和主義が広まり（南北朝合一の機運を反映か）、〈反鎌倉〉エネルギーのガス抜きが行われたようだ。とりわけ覚一本は、勝長寿院縁起譚を復活させるかたちで「紺掻之沙汰」を独立させ〝祭祀を司る頼朝像〟に仕立て上げた、という流れがみえる。覚一本は、〈反鎌倉〉から〈親鎌倉〉へと明確に舵を切ったのである。

延慶本の末尾は頼朝の果報をめでる結びだが、それを含む末尾二章段を除けば断絶平家型と同様、六代斬首による平家断絶の結末である。頼朝の果報は取ってつけたような部分である（早川厚一（一九九一）、櫻井陽子（一九九一））。これこそまさに、『平家

物語』が〈反鎌倉〉から〈親鎌倉〉へと方針転換しつつあったことの、なによりの証拠だろう。[18]

覚一本は全体として足利政権に都合のよいように改変されているふしがある（論者は兵藤裕己説に賛同している）。足利政権は同じ源氏として鎌倉幕府に続く第二の源氏政権である。ゆえに、足利政権にとって、物語内の頼朝像も醜悪なものであっては困るのだ。学界の通説とは大きく異なるが、論者は八坂系一類本・二類本は覚一本より古く、おおよそ一三四〇年代前後の時代相を反映したものと考えている（南北朝合一の機運が芽生える正平一統以前）。南朝（宮方）と北朝（幕府方）の対立が激しく、幕府にたいする反対勢力の反発も強かった時期である。その反対勢力側（宮方）に八坂系一類本は立っている。

加えて、覚一本には文覚鎌倉下向譚の部分が存在しないため、読者からすると文覚の動静がわからず、母上や乳母と同じ気持ちになってやきもきさせられることになる。八坂系一類本ではテレビの二元中継のように視点が拡散していたが、覚一本で集中化がなされたのである。読者を引き込む戦略として、覚一本のほうが練り上げられたということである。

九　おわりに
——動態的重層構造としての物語把握——

論者の物語観の根底には、ネオフィリアがある。新しいもの好き、刺激好き、前のものより良くしようとする人間の欲望のことである（読者に〝受ける〟ことも含めて）。文献学を軸にしてきた先行研究とは、そもそもの『平家物語』観が異なる。野中（二〇一四）で次のようなことを述べた（文言を一部修正）。

たとえ平安時代の文献であっても文箱に入れてあった古文書を取り出してそれをいま忠実に転写すれば、二一世紀の現代に書写された文献から千年前の声をじかに聞くことのできる史料だといえる。逆に、わずか一〇年の時しか隔てていなくても、先行テクストを意図的に改変しながら転写する人物がいれば、その先行本と後出本との間には大きな懸隔が発生する。問題は、時間ではない。書写年代でもない。テクストの転写・伝来に関わった多くの人物の中に、〈改変の指向〉があったかどうか、なのではないか。

『平家物語』の諸本間の異同がはなはだしく流動の幅が大きいのは、転写時の目移り等で説明できるようなものではなく、

鎌倉初期から南北朝後期に至る一世紀半ほどの間に人々のその時その時の思いを反映した結果なのではないか。

論者の考えかたは、山田孝雄（一九一一）以来一世紀以上にわたって続いてきた文献学的方法の対極に位置する。しかし、文献学を当然の基礎作業として踏まえ、それに人間の認知・認識のありようも乗せて総合的に物語の流動展開を窺おうとするものである。しかし、『平家物語』の諸本体系についていえば結論は真逆で、先行研究の諸本論（覚一本より下位に八坂系諸本・覚一系周辺本文を置く。拡散・混態の様相）が下降史観・衰退史観であるのにたいして、論者の流動展開論（八坂系・覚一系周辺本文が古態で覚一本は後出。収束の様相）は上昇史観・発展史観である（反動と揺り戻しを繰り返す〈綱引き〉なので単純な発展ではないが）。『源氏物語』のように作者執筆の原本が想定されて、そこから劣化しつつ拡散していったというような諸本展開論には同調することができない。『平家物語』の流動展開に関わってきた多くの人々の思いは、いかなるものであったのか。

鎌倉時代の人々の〈親京都〉の思いは、滅ぼされた平家一門への哀惜の念を通して語られるものだろう。一方〈反鎌倉〉のメッセージは、平家一門への哀惜を通して彼らを滅ぼした鎌倉に批判の矛先を向けるということである。〈親京都〉と〈反鎌倉〉は近似しているようで異なるのだ。〈反鎌倉〉の動きがあれば当然〈親鎌倉〉認識が対抗し、物語内で両者が〈綱引き〉する。木曾義仲も源義経も平家一門も「鎌倉殿」に滅ぼされたのである。彼らへの同情・共感の物語が〈反鎌倉〉の認識に支えられて形成されていることは否定しようがない。一方で頼朝挙兵の前に「福原院宣」があり義仲追討の前に「征夷将軍院宣」が置かれているということは、頼朝を正当化する〈親鎌倉〉の認識に支えられた層が後次的に覆いかぶさったということである。その両者を見渡した時、〈綱引き〉という見方でしか説明がつかないことを知る。そして諸本によって〈綱引き〉の様相は異なり、総体としての物語の動態的重層構造が見えてくる。それが、『平家物語』の流動展開だとみるべきだろう。(23)

先行研究における諸本論は、多様な『平家物語』諸本の分類、整理を目的とするところから始動したはずなのに、いつしかそれが各伝本の先後関係論へと踏み込んでしまった。その際に根拠とされてきた事象は、章段の有無や書写の際のミスであった。その営為によって不自然な後出本が量産されてきたと説明するのである。文献学的な指摘は、眼前の伝本の一段階前の善本を想定するには適していたが、おびただしい〈たすき掛け〉現象

（＝記事の順序の前後）などダイナミックな流動展開を遂げている『平家物語』研究には不向きなものであった。『平家物語』という大木を切ろうとするのに、カミソリを使うようなものである。物語構造とそれを支える認識の変容を分析するには、ナタが必要なのである（再びカミソリが必要な時も来よう）。論者の考え方は〈反鎌倉〉と〈親鎌倉〉との〈綱引き〉を踏まえつつ、対読者意識の成長に伴う形成・発展のプロセス（読者を引き込むための練成）を追うものである。この考えによって、覚一本を最終後出本と位置づけている。

本稿で述べたことは、次のとおりである。

1、六代は清盛の曾孫、重盛の孫、維盛の子として意味づけられた平家の嫡流であり、その死は血統の断絶を象徴する機能を負っている。

2、六代物語は、読者心理を揺さぶる〈緊張と弛緩〉の構造で成り立っており、時間・空間の限界線を示して読者に緊張を与える枠組みが設定された虚構世界である。

3、六代を積極的に斬ろうとする人物は登場せず北条方も含めてすべて六代の助命を願いそのために働く存在として設定されている。六代を中心とした〈同心円構図〉の設定だとみることができ、その外側には読者の存在が意識されている。

4、語り手の評語や斎藤五・六の「裸足」表現も右と連動していて、読者心理を同情・共感的な方向に誘導している。

5、二人の女性（母上と乳母）が六代への愛を競い合うかのような姿を見せ、二人の献身なくしては六代の助命は叶わなかったとする物語のつくりも、物語の外部にいる読者を引き込むための仕掛けだと考えられる。

6、〈文覚の物語〉から〈乳母の物語〉へ、そして〈乳母と母上の物語〉へと、六代物語は〈女性化〉したと考えられる。

7、六代物語は〈反鎌倉〉から始動し、八坂系一類本でその傾向を先鋭化させ、そののち〈反鎌倉〉性を弱め、覚一本に至って〈親鎌倉〉に向かった。

8、『平家物語』の諸本展開において、覚一本は最終後出本だと考えられる。

鎌倉幕府・室町幕府への直接的な批判をしにくい時代にあって、文筆の力で一矢報いるべく婉曲的な〈反鎌倉〉の物語をつくろうとすれば、物語内に同心円構図を設定し、周縁人物に読者を感情移入させ、最終的に斬首された六代に哀惜の念を抱くように仕向ける必要がある。現状の六代物語は、まさにそのような構造となっている。剣よりもペンである。

論者はつねづね、人間不在の文学研究を批判してきた（書写年代・刊行年代重視の文献偏重主義――表現構造の解読なき研究に対して）。物語は時代社会を映す鏡であり、そこには人間の欲望や畏怖が織り込まれている。そこにスポットを当てる作者（たち）の想いも込められている。複数のベクトルやバイアスが加わって、物語は動態的に変容しつつ重層化もしている。これからの文学研究は、そのような人間心理（認知・指向）をこそ問題にすべきなのではないだろうか。

注

（1）読み本系では四部合戦状本・延慶本・長門本、語り本系では古態とされる屋代本、八坂系一類の三条西家本・文禄本・中院本、同二類の城方本、同五類の城一本、覚一系周辺本文の百二十句本・竹柏園本・鎌倉本、一方系の京師本・下村本・覚一本。百二十句本については歴彩館蔵の平仮名百二十句本に依拠しつつ、適宜、斯道文庫蔵の片仮名百二十句本を参照した。源平盛衰記は六代斬首記事をもたず、平松家本は巻十二が欠巻となっている。

（2）八坂系一類本は日付の記述が多く、文覚が頼朝説得のため鎌倉に到着したのが「十一月三十日」、文覚が六波羅に戻る約束の期限が「十二月十五日」で、翌「十二月十六日卯の刻」に京都を出発（後二者は屋代本も共通）。南都本は北条が六代を捕縛した「十一月二十一日」、長門本には赦免状の日付「十二月二十五日」をそれぞれ記す。

（3）ただし、千葉論にも足りないところが二点ある。一点目は、年齢を「十二歳」に設定しておいて〝素顔はまだ幼いのに表向きには虚勢を張って大人びた顔を見せる〟という意味でのけなげさを指摘しえていない点。それが、六代発見の経緯に二日間を要している（第五節）。二点目は、けなげさとともに美しさも六代助命の経緯に必要であったと読んでいて、母の機能の強さに言及していない点（第六節）。なお、岡田三津子（一九九四）も六代助命譚の虚構性に言及している。上横手雅敬（一九八五）は助命譚というより六代が斬られたことも含めて虚構の可能性を指摘している。「六代の斬られたことを記しているのは、『平家物語』の諸本以外では、年代記、系譜の類に限られ、確実な史料に所見がまったくないのも、実は、それが無根であることを意味しているように思われる。」『高野春秋編年輯録』の「平高清」なる人物と六代を結びつけることも、ほとんど意味がないということである。

（4）北条方が平家の公達や六代の命を惜しんだ表現は次のとおり。「これをいみじとは思はねど、世に従ふ習らひなれば、力及ばず」「よに心苦しげに思ひ、涙を拭ひ、つくづくとぞ待たれける」「よに名残り惜しげに思ひまゐらせて、或いは念仏申す者も候ふ、或いは涙を流す者も候ふ」「みな袖をぞ濡らしける」「目も眩れ心も消え果てて、いづくに太刀を打ち付くべしとも思えず。前後不覚になりしかば」「北条の家の子・郎等どももみな喜びの涙をぞ流しける」。

（5）判官物の世界でも中心たる義経は象徴的な存在となり（記号化・アイコン化）、彼を支える弁慶・伊勢三郎・喜三太・鈴木・亀井・静などの動静に焦点が当てられ、能ではもはや義経は子方が務めることが増えてくる。NHK大河ドラマの数十年間の歴史でも、信長・秀吉・家康の物語が一巡したあと、山本勘助・直江兼続・黒田孝高ら補佐役的な武将に注目が集まる時期が訪れた。中心人物の中心性が自明のことなり（話題性が擦り切れ）、物語構造がそこに求心力を保持しえな

くなった時、その中心を支える側に視座を置いて物語世界を再構築しようとしたものと考えられる。中心の空洞化であり、ドーナツ化現象である。これは物語が反復再生産されつつ成熟していった必然的結果だと考えられる。軍記物語の世界では、中心には男たちのいくさの世界があり、それを取り巻く非戦闘員としての貴族男性、女性、下人などの言動が活写されることが多い。それら周縁人物は読者に近い存在であり、読者が物語世界に没入するための装置として機能する。

（6）登場人物にたいして同情的な語り手の評語は次のとおり。「うたてき」「いとほしけれ」「哀れなれ」「さこそはおはしけめと推し量られて哀れなり」「まことに詮かたなげにぞ見えたりける」「いとど心苦しうらうたくぞ思えける」「いかばかりかは嬉しかりけん」「ひとへに観音の御助けなればと頼もしうぞ思はれける」「思ふはかりぞなかりける」「いかばかりかは悲しかりけん」「心のうち推し量られて哀れなり」「まことに情け深かりけり」「せめてのことなれ」「まことに理と思えて哀れなる」「ありがたかりしことどもなり」。

（7）巻七「維盛都落」の時点（一一八三年七月）で「兄は十九、弟は十七」とあるので、「六代」がその二年後の設定だとすれば二十一歳と十九歳。同章段の維盛の言葉によれば、斎藤五・六の父は斎藤別当実盛。この兄弟は巻十「首渡」にも出るので「六代」は、斎藤五・六が登場する三度目の章段ということになる。

（8）八歳の安徳帝も、一方では大人びていて髪が黒くゆらゆらとしているが、もう一方では「幼き君」でありびんづらを結っていて小さく美しい手だと描写されている。二位尼が安徳帝を抱き上げるシーンが二度ある不自然さからみて、その違和感に気づかせようとした仕掛けなのだろう。読者の心理としては、八歳の安徳天皇が入水する場面に二つの心の持ちようが想定される。一方は八歳にしては立派な最期であったと称賛する心情で、もう一方はまだ八歳の幼さなのにかわいそうだと哀惜し憐憫する心情である。読者のニーズにはその両方が想定されるわけで、称賛と哀惜の両面へといざなうべく、少なくとも覚一本では戦略的に投入されたものだろう。

（9）義仲にたいして哀惜、兼平にたいして称賛というのは、梶原正昭（一九九二）の指摘。

（10）野中（二〇一七）の五四三頁において、『平家物語』の表現は、古態層から覚一本のような現状に至るまでに、俯瞰的・対句的・男性的な層の上に連続的・情緒的・女性的な層が覆いかぶさっていることを指摘した。ほかにも、巻六「小督」など、ただ女性が登場しているというだけでなく、女性が改作者として『平家物語』の最終段階（覚一本に近い段階）で関与しているらしいことを別稿で指摘する予定。

（11）『六代御前物語』は延慶二年（一三〇九）書写。岡田三津子（一九九三）は、延慶本『平家物語』そのものではない別の先行物語が存在しており、『六代御前物語』はそれをもとに作られた可能性を指摘する。

（12）世論誘導のためには、作者が立場を明確にすることはできない。ステルスマーケティングのように、立場を明示することなく密かにそして狡猾に世論誘導する。それが婉曲的・間接的方法をとることの理由である〔野中（二〇〇九）で述べたように『今鏡』『増鏡』も屈折表現・婉曲表現の歴史叙述である〕。対読者意識、世論誘導、これらは先行研究になかった『平家物語』観である。また、時代社会のうねりに伴う認知・認識の変容と各伝本の動態的構造を関連づけて考察するところも、先行研究の弱かったところである。

（13）『平家物語』諸本の六代物語の構造は、文覚鎌倉下向譚を除いてはほとんど相違がない。①年末の時間的期限や千本松原の境界性を意識している点。②北条時政やその家の子・郎等まで六代に同情的である点。③乳母が文覚とつなぎ、母上が東下りを誘発している点（四部本・延慶本なし）。④母上と乳母が六代への愛を競い合っているような言葉

をもつ点（鎌倉本は母上の言葉が弱い。⑤六代を捕えるまでのプロセスが二段階（ひそかに偵察→数百騎で捕捉）である点。⑥右の一段階目に六代が白い犬の子を追うシーンがある点。⑦六代の斬り手を誰も引き受けたがらない点。⑧京に戻った六代が大覚寺で白い犬の子と再会する点。それだけに、約八〇字にも及ぶ文覚鎌倉下向譚の有無は際立つ。

（14）岡田三津子（一九九四）は「文覚の登場と六代赦免が同時に行われるという構想に破綻が生じている」と述べているが、それは誤解である。八坂系一類本の文脈でも文覚鎌倉下向譚に続いて「大覚寺には人目も草も枯れ果てて悲しさいとど尽きもせず」とあり、意図的に視点の転換が行われているので、「破綻を生じている」ことにはならない。

（15）八坂系一類本と覚一本との間で一段落程度の順序の入れ替え（たすき掛け）が三か所あり、その先後関係を検討し結果、すべて八坂系一類本に古態性が認められることが判明した（別稿）。この点が先行研究と論者のもっとも異なるところ。先行研究は、延慶本の古態性を絶対視すべきでないとの段階まできていながら、語り本系の一部に最古態の要素が含まれているとまでは考えない。この考えは先行研究では唯一、梶原正昭（一九九五）が示唆するところ。

（16）平野さつき（一九八八）は、『六代君物語』について「『平家物語』にとっては生成よりも享受の面で深い関りをもつ作品と思われる」と述べているが、この物語には六代探索も二日間ではなく一日間であり、文覚の従僧が登場しないことも合わせて、構造的には『平家物語』より古態を留めている可能性が高い。

（17）別の側面に注目すると、八坂系一類本よりも延慶本・長門本が古いということもありうる。馬で駆けてくる覚文（あるいは無名の使僧）について、「高雄の聖の弟子学恩といふ者なりけり」（四部本）、「これは、高雄の聖の弟子なり」（延慶本・長門本・屋代本）、「文覚上人の弟子なり」（八坂系一類本・南都本）と語り手が説明する段階があって、さらにその後、説明の言葉が消えてゆく覚一系周辺本文（百二十句本・竹柏園本・鎌倉本）、一方系へという流れを想定しうる。画面への語り手の映り込みに相当する、読者や聴衆への説明的言辞を覚一本等が消去してゆく傾向は、随所に指摘できる。物語への没入を阻害する興ざめな言葉だからである（別稿）。つまるところ、構造的には八坂系一類本が古態で、細かな説明的言辞の存否でいえば延慶本が古態で、双方の元になった原型を想定せざるをえない。

（18）春日井京子（一九九七）も、覚一本の〈親鎌倉性〉について指摘する。ただし、地理的な鎌倉でなく京都の六波羅探題であっても鎌倉寄りの認識をもつことはありうる。

（19）論者は二〇一七年ごろからいくつかの〈綱引き〉論を発表している。①「軍記物語の成立」「悠久」151号（二〇一七年一一月）、②「「那須与一」の裏メッセージとその発信源―『平家物語』〈綱引き〉論の糸口として―」「日本文学論究」80号（二〇二一年三月）、③「『平家物語』一の谷合戦譚の形成と変容 ―〈綱引き〉論からの分析―」「古典遺産」70号（二〇二一年六月）、④「『平家物語』形成の四段階―『治承物語』とその周辺―」「古典遺産」71号（二〇二二年八月）。書籍では、①『那須与一の謎を解く』（武蔵野書院、二〇二二年、巻末索引の「綱引き論」を参照されたい）、②『解剖図鑑　平家物語』（エクスナレッジ、二〇二四年）。

文　献

今井正之助（一九八三）「『平家物語』終結部の諸相―六代の死を中心に―」「軍記と語り物」19号

上横手雅敬（一九八五）『平家物語の虚構と真実　上』東京：塙書房
岡田三津子（一九九三）「『六代御前物語』の形成」「国語国文」62巻6号
岡田三津子（一九九四）「六代をめぐる説話」『あなたが読む平家物語2　説話と語り』東京：有精堂出版
梶原正昭（一九九二）『岩波セミナーブックス古典講読　平家物語』東京：岩波書店
梶原正昭（一九九五）「平家物語――語り本に見る原態のおもかげ――」學燈社「國文學　解釈と教材の研究」40巻5号
春日井京子（一九九五）「『六代御前物語』と『平家物語』六代説話」「学習院大学人文科学論集」4号
春日井京子（一九九七）「「紺掻之沙汰」の生成と展開――覚一本を中心に――」「千葉大学社会文化科学研究科研究プロジェクト報告書　第1集『平家物語の成立』千葉：千葉大学社会文化科学研究科
櫻井陽子（一九九九）「平家物語の終結様式における断絶平家型の位置」「軍記と語り物」35号
佐々木八郎（一九三八）『平家物語講説』東京：早稲田大学出版部　四四二頁／（一九五〇）の補訂版では四八五頁
千葉知樹「六代説話論―六代像への考察を中心に―」「軍記と語り物」33号
冨倉徳次郎（一九六四）「附録一　六代御前物語」『平家物語研究』東京：角川書店
野中哲照（二〇〇九）「『今鏡』の表現構造」「鹿児島国際大学大学院学術論集」1集
野中哲照（二〇一四）「『後三年記』は史料として使えるか」『後三年記の成立』東京：汲古書院
野中哲照（二〇一七）「『陸奥話記』は史料として使えるか」『陸奥話記の成立』東京：汲古書院
早川厚一（一九九九）「『平家物語』の成立――延慶本の終結部から――」「軍記と語り物」35号
平野さつき（一九八八）「〔資料紹介・翻刻〕早稲田大学図書館蔵『六代君物語』」「軍記と語り物」24号
山田孝雄（一九一一）『平家物語考』（国語調査委員会編『平家物語につきての研究（国語史料　鎌倉時代之部）前編』、後編は一九一四年刊の『平家物語の語法　上・下』）／（一九六八）再刊　東京：勉誠社